

「流通とSC・私の視点(732)」(2006年12月20日)に、ノーベル平和賞を授賞したバングラデシュのムハマド・ユヌス氏とグラミン銀行のことを紹介しました。

今また、ムハマド・ユヌス氏の「ソーシャルビジネス」が注目を浴びています。

日本経済新聞(2009年5月2日号)に、ソーシャルビジネス及びムハマド・ユヌス氏の記事が掲載されていましたので、ムハマド・ユヌス氏の言葉を私なりに参考しながらそれに加筆しました。

世界経済を混乱に陥れた米国発の未曾有の金融危機は、一握りの向こう見ずな人達によって引き起こされ、その影響は世界中に広がりました。その背景には利益至上主義、株価至上主義、効率至上主義がありました。

ムハマド・ユヌス氏は、人間は本来、利己的な部分と「無私」の部分の併せ持つ多面的な生き物と考えています。ただ、これまで「無私」が経済に組み込まれることはありませんでした。ムハマド・ユヌス氏は、無私に基づいたビジネスを創造し、資本主義に取り入れることでゆがみを正し、完成形を作り上げようとしています。

この考え方をソーシャルビジネスと呼んでおり、次の内容を持っています。ソーシャルビジネスとは、貧困や環境、少子高齢化等の社会的問題に取り組むビジネスのことであり、主体は株式会社や非営利組織(NPO)等様々あります。営利目的でも無償のボランティアでもなく、ビジネスの手法を活用して持続的な取り組みを目指し、これまでは行政等の公的センターが主に担当してきましたが、民間の高い専門性を駆使した効果的な問題解決の方策として注目が集まっています。

また、ムハマド・ユヌス氏は次のように語っています。

自分の利益を守ろうと思った瞬間に判断力は曇ります。だからソーシャルビジネスに金銭的な見返りがあってはなりません。百万ドル出資したら、十年後でも同じ百万ドルが戻ってくるのみです。配当や利息はありませんが、他人に何かできるという喜びや満足度、他人の生き方を変えていく嬉しさが配当のように存在します。人の役に立ちたいという思いは人間誰も心の中にあるはずで、資本主義の利益追求型ビジネスでお金を儲けることは「手段」です。そこで得たお金で世界を変えることが「目的」です。誰かが抱える問題を解決すれば、きっと誰かの記憶に残ります。それこそが人間の生きる意味です。

最後に、ムハマド・ユヌス氏がノーベル平和賞を授賞した「マイクロファイナンス」について述べたいと思います。

貧困撲滅へ低所得層に事業資金として少額のお金を貸し出す仕組みです。無担保ですが、代わりに数人の連帯責任グループを結成させ、返済の約束を守らせます。融資を受けた人は小規模な商店や農業等を営むことで自活し、貧困からの脱出につなげるシステムです。

<インタビューをした日経新聞アジア部 岩城 聡氏の論評>

## 「人間を信じろ」根幹に

「『誰かの役に立った』という心理的な“配当”だけで、ソーシャルビジネスの出資者は満足すると思いますか?」。こんな意地悪な質問をぶつけてみた。

ユヌス氏はクルクルとよく動く瞳で「我々は小さいころから『お金儲けではないビジネス』を考えられずに育っただけ」と一言。人間誰もが「無私」の慈しみの心を持つ。それに向けて営まれる無損失・無配当の事業こそ「世界をもっと美しい場所にしてくれると思いませんか」と笑う。

「人間を信じろ」がユヌス氏のメッセージの根幹だ。エリート達が編み出した実態のない経済の宴が終わり、世界は新たなビジネスモデルを模索している。誰もが持つ、見返りを求めない「無私」の心を揺さぶって目覚めさせ、ビジネスに取り入れることができれば、貧困を葬り去ることができる。理想論にも聞こえる主張だが、ユヌス氏という強力な唱道者を得て、欧米等でその実現を目指す機運が胎動しているのも事実だ。

ユヌス氏は最後に、にこやかに「日本には資金も高い技術もある。あとは行動を起こすかどうかです」と促した。日本への期待の高さと受け止めることができるだろう。

(株)ダイナミックマーケティング社<sup>+</sup>

代表 六 車 秀 之